

## 何をどこにつくるか

安岡則武 (姫路工業大学名誉教授)



思い返せば、放射光施設の建設と活用が、世界各地で始まっていたのは1970年代のことだったでしょうか。日本では東大核研の INS-SOR の初期の成果に刺激され、筑波の KEK に放射光施設を建設しようという運動が全国的に展開されました。小生は当時大阪大学に在籍していましたが、ストーレージリングを作ろう、という呼びかけで研究会などを何度も開催したことを覚えています。そしてフォトンファクトリーが1980年代に建設され、急速に成果を挙げて行きました。

当然のことながら、地理的に遠い関西地区の研究者たちは、相当の施設の立地を求め、関西 SOR 世話人会を結成し、運動を始めました。経過とともに、関西という地域性を強調するのはよくないということで 6GeVSR 計画と名称が変更されました。ヨーロッパで欧州放射光施設が建設され、アメリカでも Advanced Photon Source の計画があり、日本も肩を並べようとする運動になったと言えましょう。

1980年前後に日本の各地でテクノポリス構想が展開され、順次建設が進んでいました。今でいう成長戦略の一環だったのでしょうか。アメリカで発展したリサーチトライアングルという構想が根底にありました。高度な技術を集積した企業、公的な研究所、そして高等教育研究施設という3つの要素を備え、それら相互の緊密な協力のもとに、技術の発展をはかり、経済の成長を促す、というものでした。つくば研究学園都市がその最大でもっとも成功したモデルでした。

小生が1985年に着任した姫路工大は兵庫県の西部にありました。県は西播磨テクノポリスという構想を実施に移す段階に直面していました。いくつかの関西系の有力な企業に働きかけ、進出の約束をもらっていました。教育機関として理学部の設置を進めていました。しかし、残る公的な研究機関の誘致に頭を悩ませていました。その時期に 6GeVSR 計画の中心として活動していた角戸正夫氏が1983年に姫路工大学長に就任したことから、この計画がにわかに実現へと動きます。リサーチトライアングルのひとつとして、放射光施設計画が位置づけられ、兵庫県と工大が一体となって誘致運動を進めることになりました。当時の文部省としては、新しい施設を作るなら当然筑波の KEK である、という考えがあり、とても進む話ではありませんでした。しかし、海外の動向を注視していた当時の科学技術庁が関心を持ったこともあって、実現の見通しが生まれてきました。その蔭には 6GeVSR 計画の推進に結集されていた多くの先生方の並々ならぬ努力があったことは言うまでもありません。

誘致運動を進めたのは兵庫県だけではありませんでした。科学技術庁が設置の意思を固めたことが伝わるいくつかの自治体が誘致に乗り出しました。調査費が閣僚折衝の結果認められたときには大喜びだったのですが、そこから複数の自治体の中で誘致競争が始まるとは思っていませんでしたので、一挙に不安に見舞われました。しかし紆余曲折を経て、1989年に播磨科学公園都市に立地することが決定されました。最

初に放射光の発生が確認され、供用が開始されたのは1997年のことでした。その後の発展は周知のとおりです。自由電子レーザー装置 SACLA の利用も開始され、ますます注目される成果が続出しています。

フォトンファクトリーと SPring-8 の例にありますように、このような大型の研究施設が計画段階から実現に至るまで少なくとも10年はかかるということです。もっと萌芽的な段階から数えれば、世代を越えての努力が必要だということを感じます。研究者のコミュニティの合意が何よりも前提です。しかし、どこへ作るかということになると、異なった力学が作用するようです。そこでは研究者コミュニティにおいても意見が割れることがあることでしょう。そこを克服して施設の建設を実現した先達の努力に敬意を表したいと思います。

放射光ではありませんが、大型ハドロン計画としてスタートした陽子加速器計画も年月を経て J-PARC として稼働しています。放射光のコミュニティは新たな施設計画を持っています。先達の努力に学んで、コミュニティの合意を形成して実現へ導き、後輩たちの研究する場を作っていただきたい、と願っています。